

松本亀次郎研究 : その教育観と実践

二見, 剛史

<https://hdl.handle.net/2324/7157404>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (教育学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 二見剛史

論 文 名 : 松本亀次郎研究 ―その教育観と実践

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、戦前、来日中国人留学生たちに多大な影響を与えた教育家兼研究者松本亀次郎の生涯を総合的に探索したものである。本研究は明治以降昭和戦前までのアジア教育史研究の一事例ではあるが、我が国の近代学校史を踏まえた松本亀次郎研究は、広く世界各地との友好親善史に開かれ、さらに広く「学問」に通じる研究分野の視座を示し、未来への展望に通じるものを包蔵しているように思われるので、その方向で研究を進めてきた。

明治維新期の日本では「和魂洋才」で近代化を推進し、隣国中国では「中体西用」を看板にした。こうした両国のちがいにも留意しながら、本研究は、比較教育的に分析し、日中関係のあるべき姿として「中国人の日本留学」や「お雇い日本人教習の活動」に注目した。研究の時期は、明治維新から昭和敗戦までである。本研究の主たる対象としては松本亀次郎が関わった約 80 年の両国関係を重視し、彼が研究者として活躍した「宏文学院」在職期とそれ以降の「京師法政學堂」、「東亜高等予備学校」時代に焦点をあてている。

日中友好史に関わる国際的学術交流は、相手国への認識と尊敬の念が前提であり、本研究では「学問論」「教育者像」の展開をクローズアップすることに研究の方向を見出した。すなわち、松本亀次郎の全生涯を対象に、国際関係史の中で松本の実践的教育思想を位置づけている。「大学」そして「学問」の在り方を多角的に検討することにおいて、教育史的アプローチにより先見性を有する数々の実践事例を総合的に纏め上げた次第である。

本論文は 8 章構成とし、序章から第 2 章までにおいて、松本亀次郎の研究歴に歩調を合わせ、「生い立ち」、師範学校、宏文学院、京師法政學堂と進み、中国人留学生の教育・研究機関の内容を吟味する形で、日本語研究の第一人者に認められてゆく姿をたどっている。次の第 3、4 章では、近代における大学（高等教育）の一環としての「予備教育」の分野に「中国人留学生教育」の存在があり、日本人教師や研究者がその充実のため如何なる努力・協力をしたか、どのような関わりの中で「留学生教育に携わったか」を問いながら、その教育観に迫っていく。この時代に松本は、日本語教育の内容や方法を中国本土で実地検証できたこと、そして中国近代化への意欲をもった教授陣のなかに自らも在籍し、日本語についても「教えながら学ぶ」という実地体験を通して、自身への期待と責務、自信を培った場所として、同校の果たした役割を考察していくことになる。そしてこの時期、松本の中国観が形成（修正）されることとなった。第 4 章「宏文学院」では、特に教え子の一人魯迅との出会い・学び合いが日本語学者としての力量を高めたことと並行して、留学生教育として教壇で対象とする学生が日本人から一転して中国人となり、「松本の中国認識」は変化を遂げているわけである。

続く第 5、6、7 章では、松本の勤務先が東京から北京へと移りさらに帰国する過程で、彼自身が「日華同人共立」を冠頭においた「東亜高等予備学校」を東京の新天地に創立したことの意義と教

育思想について吟味している。第5章「京師法政学堂」では、日本人教習の一員として中国最高学府の学生に対し、研究上多くの仲間と日本語教育を推進できたこと、北京に招聘された日中両国人間の交流が、帰国後の学校（大学）創設の大きな参考になったこと、そして、何よりも、中国文化に対する認識が更に深まったことなど、松本亀次郎の教育観に変化が生じてきたことに注目した。

第6章と第7章では「東亜高等予備学校」について、かつての教え子曾横海らの要望を受けて、本格的予備教育機関の実践を通して「日華同人共立」は松本の国際教育上の信念となったことを明らかにしている。特に第6章は中国学制の変化に伴う特設予科制度の改編、そのなかで、東亜学校と改称後の高等予備教育が改編されてゆく様をたどり、晩年の松本亀次郎の教育への態度や教育交流への信念を描写する。ここまで、彼が足場とした教育機関を重層的に考察する中で各教育機関での問題点も明らかにしてきた。以上のような重層的考察を基軸として、最後の第8章においては、教育実践の上で関係を持った人たちの発言内容を適宜紹介しながら総括している。松本の実践的思想は「日華共存共栄論」「留学生教育に関する認識」「学問観と教師像」であり、実践から得られた学問観、教育観と共に、日中関係史からみた松本の実践についての位置づけは大きい。大局的視点に立って世界の現状を見る時、国家（自国）優先の教育観・学問観が残存し帝国主義的思想が払拭されないまま進行していることへの指摘ともつながりがあることを再吟味している。松本の実践的理論の内実は、日中関係交流史の中でアカデミズム、リベラリズム、ヒューマニズム等の融合体であり、21世紀にも通じる視野及び哲学に裏づけられたものと言うことができ、新時代の高等教育ならびに教育研究者にとって、松本自身の発言や関係者の評価には未来への展望が込められている。